言語研究（*Gengo Kenkyu*）**166**: 29–57（2024）　doi: 10.11435/gengo.166.0_29

日本語における状態変化の表現
――認知的類型論の数量的研究――

【慫慂論文】

松本　曜　　氏家啓吾
国立国語研究所／総合研究大学院大学　　国立国語研究所

【要旨】数量的アプローチによる認知言語学的な類型論的分析の試みとして，日本語の状態変化表現に関する研究を行う。BCCWJ を用いた 12 の状態変化表現に関する調査結果を，移動事象表現の類型論と共通の枠組み（松本 2017a; Talmy 2000 も参照）によって分析する。その結果から，日本語では文の主要部が状態変化（あるいはその一部）を表すことが圧倒的に多く，特に状態変化を構成する「移行」と「結果状態」の両方を，一緒に主要部のみで表す場合が多いことを明らかにする。その点で，日本語は「変化主要部表示型言語」であり，移動事象表現が主として経路主要部表示型であるのと似ているが，状態変化表現の方が主要部の役割が大きいことを指摘する。また，主要部を用いるかどうかには，状態変化の種類によって大きな違いが見出されることを示し，日本語における語彙のレパートリー，さらに結果状態の性質などの観点からその説明を試みる。さらに，状態変化と「共イベント」の共起頻度が低いという観察に基づき，タルミーの類型論の限界を論じる *。

キーワード：状態変化，認知的類型論，コーパス，数量的研究，主要部表示型言語，動詞，形容詞

1. はじめに

この論文は，認知言語学的な言語類型論における数量的研究の試みとして，日本語の状態変化表現に関してコーパスを用いた研究を行うものである[1]。認知言語学における類型論的研究としては，タルミーの研究（Talmy 1985, 1991, 2000: Ch. 3）に端を発する，空間移動事象の言語表現の研究がさかんに行われてきた（Matsumoto and Kawachi 2020, Matsumoto To appear を参照）。状態変化の言語表現は，この移動表現の類型論的研究との関連でしばしば取り上げられてきた（Talmy 2000，小野 2004，Son and Svenonius 2008，Croft et al. 2010，スプリング 2015，Kawachi 2016，Acedo-Matellán 2016，Ito 2018）。移動の表現と状態変化の表現に並行性があることは以前から指摘されており（Gruber 1965，Lakoff and Johnson 1980，池上 1981，

* 本稿の執筆においては，イン・ウキ氏，河内一博氏，ベス・レヴィン氏，諸隈夕子氏，さらに『言語研究』の査読者から有益なコメントをいただいた。感謝を申しあげる。本稿は，科研費 19H01264 と国立国語研究所共同研究プロジェクト『述語の意味と文法』の成果である。
[1] この研究では，国立国語研究所が開発した『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）2021.03』及びコーパス検索アプリケーション『中納言 2.7.2』，さらに国立国語研究所と Lago 言語研究所が開発した NINJAL-LWP for BCCWJ 1.30 を利用している。

Jackendoff 1983，Goldberg 1995，Talmy 2000，Goldberg and Jackendoff 2004，Levin and Rappaport Hovav 2013 など。岩田 2010 も参照），これらに共通の類型論を考えることは自然な展開と言える。しかしながら，移動表現と比較して，状態変化表現については類型論的性質の解明が十分になされていないように思われる。

特に必要と思われるのは数量的な研究である。20 世紀後半の言語学では内省に基づく研究が主導的な役割を果たしてきたが，2000 年代に入ってデータの客観性が叫ばれるようになり，コーパス・実験などにもとづく実証的な数量的研究へと研究方法がシフトしてきた。認知言語学もこの流れの中にあり，2008 年を契機に国際的な研究は数量的な研究に移行したと言われている（Janda 2013）。この点で認知的類型論はどうかというと，移動表現に関しては近年多くの実験が行われて数量的研究が進んでいるが（松本 2021 を参照），状態変化に関してはそのような研究が包括的には行われていないのが現状である（例外としては，2.1 節で触れる研究のほか，使役状態変化に関する実験研究がある（Majid et al. 2007，Kawachi et al. 2018 など））。

そこでこの論文では，日本語の 12 種類の状態変化の言語表現についてコーパスを用いた調査を行い，その表現パターンの類型論的な特徴を明らかにする。その際，状態変化の種類の違いなどによって変異があることに注目し，日本語の語彙のレパートリー，結果状態の性質などの観点からその説明を試みる。さらに状態変化の表現パターンを，同じコーパスを用いた移動の言語表現の研究結果（松本 2017b）と比較することにより，両表現の並行性の程度を検討する。

状態変化の表現については，認知言語学以外の枠組みの中で優れた研究がある（Beavers and Koontz-Garboden 2020 など）。それについては関連する箇所において触れることになる。

本論文の取るアプローチについて若干補足しておく。意味の研究においては，「この表現はどのような意味か」を問う語義論（semasiology）と「この概念はどのように表現するか」を問う名義論（onomasiology）とがあるが（Grondelaers and Geeraerts 2003 を参照），この研究は後者の立場からの研究である。すなわち，特定の状態変化について，それを表す日本語の表現がどのようなものかを考察する。この名義論的なアプローチで数量的研究を行うには，コーパスよりも実験が合っているように思われるかもしれない。特定の事象を録画したビデオやそれを描いた絵などを見せて，それをどのように表現するかを考察するという実験である（松本 2021 を参照）。しかしそのような実験的手法は，移動や具体的な状態変化については用いやすいが，〈良くなる〉のような一部の抽象的な変化については使いにくい。そこで本研究では，幅広い状態変化を扱うために，コーパスを用いて名義論的な研究を行う。コーパスにおいても特定の事象を表す表現を網羅的に検索することにより，その事象を表現するのに使われる表現の頻度を明らかにすることができる。本研究はこの可能性を追求するものである。

本論文では，まず 2 節で研究課題と分析に用いる枠組みを提示し，3 節で調査方法について解説する。その後，4 節で全体的な結果を見てから，5 節で 4 種類の状

態変化について詳細に検討する。6 節では状態変化の種類による変異について考察を行い，移動表現との比較も行う。

2. 研究課題と類型論

2.1. 研究課題

認知言語学者のタルミーは，複数の意味領域に適用されるイベント統合の類型論を提唱し，その一部として移動事象と状態変化事象の表現を考察している（Talmy 1991, 2000: Ch. 3）。タルミーは諸言語を動詞枠付け言語と付随要素枠付け言語の 2 つに分類する。分類の基準は，移動や状態変化がその様態や使役手段など（いわゆる「共イベント」）とともに単節で表現される場合に，移動の経路や状態変化の結果が，文中のどの位置で表されるかである。すなわち，移動表現の場合で言えば，移動の経路を主動詞で表現する言語と，主動詞に付随する要素（不変化詞，動詞接辞など）で表す言語に分けられるという。たとえば日本語は前者であり，英語は後者であるとされる。これを示すのに，(1)のような例が挙げられる（松本 1997 など）。

(1)　a.　ビルは彼を押し<u>出した</u>。
　　b.　Bill pushed him <u>out</u>.

（1a, b）では，外方向への移動が，移動の使役手段〈押す〉とともに一つの節に統合されて表現されている。そのような文の中で，(1a)では経路が複合動詞の後項（主要部）で表される一方，（1b）では不変化詞で表されている。

タルミーは，状態変化の表現においても移動の表現と並行した傾向が見られるとする。日本語と英語では，（2）のような例がそれを示すものとして挙げられる。

(2)　a.　ビルはドアを押し<u>開けた</u>。
　　b.　Bill pushed the door <u>open</u>.

（2a）では変化が複合動詞の後項で表される一方，（2b）では結果句である形容詞句で表されており，（1a），（1b）と並行的である。（2b）は（使役）結果構文の例だが，この構文は（1b）のような使役移動構文からメタファーによって拡張したと考える者もいる（Goldberg 1995, Goldberg and Jackendoff 2004）。このような並行性から，移動表現と同じ類型論が状態変化表現にも適用されると考えられている。

しかし，状態変化の表現は，移動の表現と並行的とは限らない。まず，一部の言語で，移動と状態変化で異なる表現パターンが取られることが知られている。英語は，移動の領域では付随要素枠付けパターンを最も特徴的な型として示すとされる（Talmy 2000）。しかし状態変化の領域では，動詞枠付けと付随要素枠付けの両パターンが混在するとされる（Talmy 2000: 240）。たとえば，（2b）のほかに，（3）のように状態変化を主動詞で表す表現もごく自然に使われる。状態変化の種類などによって，パターンが使い分けられているようである。

(3)　Bill opened the door (by pushing it).

また，状態変化の表現では，移動の表現には対応しない表現も見られる。たとえば，(4) のような表現も一般的である。

(4)　a.　I became happy.
　　b.　That made me happy.

この種の文を結果構文として扱う立場もあり（Goldberg 1995: 87），その場合は（2b）と同様に付随要素枠付けパターンとなるが，（2b）と異なって結果状態への移行が一般的変化動詞の became/made で表されていることから，変化の一部は主動詞で表されていると考えられる。このような文は，移動の表現の Jack went out などが対応するようにも思えるかも知れないが，go が直示性を表す（話者（及び聴者）の領域以外への移動を表す）のに対して，become/make にはそのような性質はないといった違いがある。

以上のように，状態変化の表現と移動の表現との並行性は完全なものではない。したがって，状態変化特有の要因を考慮した上で多様な種類の変化について表現パターンの使用頻度を研究して初めて，状態変化の表現の性質が明らかになると思われる。

小野（2004）と伊藤（Ito 2018）は，両者の並行性を視野に入れながら，状態変化の表現を数量的に研究している。小野は日英語の小説とその翻訳に基づいて移動と状態変化の表現を比較し，日本語と英語の両方において，タルミーの類型論において同じ型に属する表現が多いと主張している。伊藤は BNC を用いて，英語の〈死亡〉〈破壊〉〈消火〉〈（ドアなどの）開放〉の 4 種類の状態変化について各種表現の頻度を調べ，状態変化の種類によっては必ずしも移動と並行した表現が多用されるわけではないことを明らかにしている。また，状態変化の表現としてよく取り上げられる結果構文の頻度は高くはなく，〈死亡〉では 9.9% に過ぎなかったと指摘している（使役状態変化の場合）。このような研究を幅広い状態変化について行うなら，それは状態変化表現の理解に大きく貢献しうると思われる。本研究は日本語においてそれを行うものである。

本研究でもタルミーらと同様に，移動表現の類型論的研究で使われている枠組みを状態変化表現に適用して，後者の性質を明らかにする。特に注目する点は，1）日本語において状態の変化を表す形式は文のどの位置に現れる傾向があるか，2）日本語でその位置について変異があるとすれば，どのような要因によるか，の二点である。ただし，ここで用いる枠組みは，タルミーのものとはいくつかの点で異なる（次節を参照）。

この論文では，主語指示物の変化を表す表現（「頬が赤くなる」など）およびそれに類する意味を表す表現（「頬に赤みが差す」など）を「自己状態変化表現」と呼び，目的語指示物の変化を表す表現（「彼を喜ばせる」など）およびそれに類す

る意味を表す表現（「彼に喜びを与える」など）を「使役状態変化表現」と呼んで区別する。「壊された」のような受身の場合は，「使役状態変化表現」として扱う。

2.2. 状態変化の意味要素

本研究では，状態変化を構成する意味要素として，移行（transition）と結果状態（result state）を区別する（Talmy 1991，2000 も参照）。たとえば，「壊れる」という表現は，破壊されている状態（構造体の物理的統合性や機能が失われている状態）への移行を表しており，移行と特定の結果状態の両方が一つの形態素の中に表現されている。それに対して，「粉々になる」では，「粉々（に）」が特定の結果状態を表し，「なる」は結果状態への移行を表す（その結果状態は特定化されていない）。なお，タルミーは移行のタイプとして，結果状態への移行，初期状態からの移行，さらには移行の欠如の三つを認めるが（Talmy 2000: 251），ここでは結果状態への移行のみを扱う。

結果状態への移行は，移動における経路 TO に相当するものである。移動と状態変化の並行性を議論するなら，本来なら経路の表現位置と移行の表現位置を比較すべきである。しかし，状態変化表現においては，移行と結果状態を合わせて一つの形式で表現する場合が多いため，タルミーは「移行＋状態」の表現位置を問題にする（Talmy 2000: 240）。本研究では，「移行＋状態」として表現する場合も，移行と結果状態を分けて表現する場合も，状態変化を表すものと見なす。

2.3. 状態変化表現の類型論的分類

本研究では，状態変化を表す言語表現を，その変化が表示される文中の位置に注目して分類を行う。その位置については，主要部（head）と主要部外要素（head-externals）という大きな区別を行う（松本 2017a; Matsumoto and Kawachi 2020; Matsumoto To appear; 主要部については Matsumoto 2003 も参照）。文の主要部とは文の諸特性を決定する要素で，ここでは項構造を決定する要素をさして使う。具体的には文の主動詞であるが，主動詞が複合動詞の場合は，その中で項構造を決めている要素をさす。主要部外要素とはそれ以外の要素のことである。この区別は移動や状態変化の表現の類型を論じる際に重要な区別であることが知られている（松本 2017a）。文の主要部で変化が表示される場合，自己状態変化と使役状態変化は必ず動詞で区別されることになる（「壊れる」vs「壊す」）。それに対して主要部外要素には，結果句に使われる形容詞のように，自己状態変化と使役状態変化の両方に使うことができる表現が含まれる。このように，変化を文の主要部で表すかどうかは，言語にとって重要な事項なのである（Matsumoto 2020）。

この分類に基づいて，状態変化（あるいはそれを構成する要素）が主要部で表されることが多い言語は，「変化主要部表示型言語」，それが主要部外で表されることが多い言語は「変化主要部外表示型言語」と呼ぶことができる。この分類は排他的な二分法ではなく，どちらが優勢かという程度性の問題である。また，変化が同じ

文の中で主要部と主要部外の両方の位置で表されることが多いという場合もありうる。

ここで採用している類型論は，いくつかの点でタルミーのものと異なるが[2]，その一つは「共イベント」の有無に関することである。共イベントとは移動の様態，状態変化の原因や使役手段などの二次的イベントのことで，主動詞，複合動詞前項，後置詞句などで表される。(5) では下線部が共イベントを表している。

(5)　a.　きれいに拭いた
　　b.　ドアを押し開けた
　　c.　栄養失調で死ぬ
　　d.　それを燃やすと暖かくなった

タルミーの類型論においては，共イベントと主要事象（移動事象や変化事象）が同じ節で表現されている場合の変化表示位置が考察される（Talmy 2000）。したがって，（5a–c）は考察の対象となるが，（5d）はそうならない。また，共イベントがない「ドアを開けた」も対象とならない。これに対し，本研究では共イベントの有無（さらに単一節であるかどうか）を問わずに，すべての状態変化表現を考察の対象とする。後に指摘するように，タルミーのように対象を限定すると，大多数の状態変化表現が考察の範囲外となってしまうからである。

3. 調査方法

3.1. データの収集

本研究では，大規模日本語コーパスである『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ，バージョン 2021. 03）を用い，状態変化表現における変化表示位置を調査する。状態変化の主な概念領域から一つずつ，12 種類の状態変化を取り上げる。概念領域と調査対象の変化およびその表現例は，表 1 にリストするとおりである。これらについて，自己状態変化表現と使役状態変化表現の両方を検討する。なお，表現例として挙げたものは該当する表現のごく一部である。

[2] このほか，1）主動詞以外の動詞（従属節の動詞など）を主要部外要素として扱うことを名称の中で明示的にしている点，2）（主に移動表現に関して）動詞付随要素には該当しない前後置詞や格接辞を主要部外要素として扱うことをはっきりさせている点でも異なる。

表1　調査対象の状態変化

概念領域	変化	表現例（自己状態変化と使役状態変化）
姿勢	〈着座〉	「座る」「座らせる」
生命	〈死亡〉	「死ぬ」「殺す」
意識	〈覚醒〉	「目覚める」「目覚めさせる」
感情	〈喜悦〉	「嬉しくなる」「嬉しくする」
形状・大きさ	〈（物理的）拡大〉	「大きくなる」「大きくする」
色	〈赤色化〉	「赤くなる」「赤くする」
統合性	〈（物理的）破壊〉	「壊れる」「壊す」
相	〈氷結〉	「凍る」「凍らす」
温度	〈温度上昇〉	「熱く（暖かく）なる」「熱く（暖かく）する」
開閉	〈（ドアなどの）開放〉	「開く」「開ける」
衛生状態	〈清潔化〉	「きれいになる」「きれいにする」
評価	〈改善〉	「良くなる」「良くする」

データ収集の手順は以下の通りである。

1）検索対象の予備調査：各状態変化を表す言語表現を網羅的に調査できるように，各変化と関わる動詞，形容詞（形容動詞を含む），状態名詞，イディオムなどを，類語辞典（『分類語彙表』など）と内省を用いてリストした。さらに，関連する状態名詞等と共起する語を語彙プロファイラー NINJAL-LWP for BCCWJ を用いて調べ，状態名詞を含む状態変化表現を広くリストした（「死に至る」「汚れを落とす」など）。

2）検索：上記の方法でリストされた状態変化表現の用例を収集するため，BCCWJ の書籍サブコーパス（5900 万語）を『中納言（2.7.2）』を用いて検索した。一部の状態変化に関しては，検索条件に制限を設けた。例えば，〈開放〉についてはドア類，〈（物理的）破壊〉については固くて薄いもの（ガラス，磁器類，卵の殻など）が変化主体になるケースに限定した。例として，〈死亡〉に関しては以下の方法で検索を行ない，分析候補文を得た。予備調査では得られなかった表現が見つかれば，それも含めた。

i）「死ぬ」「殺す」などの単純動詞の例を語彙素検索によって収集。
ii）「死」を文字列検索してそれを含む語をキー表示し，「死」を含む複合動詞等の例を収集（「凍え死ぬ」「討ち死にする」「戦死する」など）
iii）「殺」を文字列検索してそれを含む語をキー表示し，「殺」を含む複合動詞等の例を収集（「刺し殺す」「射殺する」など）
iv）「死」「殺」を含まない複合動詞等の例を，個々に語彙素検索を行って収集（「崩御＋為る」「絶命＋為る」など）
v）「死＋が＋［動詞］」,「死＋を＋［動詞］」,「死＋に＋［動詞］」で語彙素検索を行っ

て，名詞の「死」を含む表現で〈死〉の事象を表す例を収集（「死が訪れる」「死を迎える」「死に追いやる」など）

vi）「命＋を＋［動詞］」で語彙素検索を行い，名詞の「命」を含む表現で〈死〉を表す例を収集（「命を失う」「命を奪う」など）

vii）上記の方法で拾えなかったイディオムなどを個別に語彙素検索により収集（たとえば「息＋引き取る」で「息を引き取る」を収集。そのほか，「息の根を止める」「（この）世を去る」「（天に）召される」など）

3）分析対象として採用する状態変化文の決定：上記の方法で得られた分析候補文の中には分析対象の変化を表さないもの（「息を殺す」など）も含まれているため，そのような例を手作業で削除した。そのようにして得られた分析候補文の数が，自己状態変化と使役状態変化でそれぞれ 500 を超えていた場合は，最終的なランダムサンプリングを行い，500 を採用した。500 に達しなかった場合はすべてを採用した。500 に達しなかったのは，自己状態変化では〈氷結〉〈破壊〉〈清潔化〉，使役状態変化では〈覚醒〉〈着座〉〈氷結〉〈破壊〉〈喜悦〉〈拡大〉である。

3.2. 分析の観点

このようにして分析対象として採用した状態変化文について，状態変化が表示されている位置について以下のように分類を行った。

a）【主要部のみ】：「彼は死んだ」のような文は，文の主要部をなす動詞が変化主体の状態変化（移行と結果状態の両方）を表しており，さらに他の要素では変化が表されていないので，【主要部のみ】として扱った。また，「～は目が覚めた」のように人の状態変化をその身体部位の変化として表現する場合や，「～の大きさが巨大化した」のように，尺度値の変化として表現されている場合は，動詞が状態変化動詞なら，このタイプに準ずる表現とみなし，【主要部のみ（身体部位 / 尺度）】として集計した[3]。これらは多くの場合は「彼は目が覚めた」のように，二重主語構文で小主語に身体部位や尺度を表す名詞句が現れ，大主語の指示物の状態変化を表す表現である。「～は目を覚ました」のように，身体部位・尺度を表す名詞句が目的語になる場合もある。さらに，使役状態変化の表現の場合は，「蛇に噛まれて死んでしまう」のように，使役事象を従属節で表し，結果としての状態変化事象を主節の主要部で表す場合もある。このような場合は【主要部のみ（状態変化事象部分）】

[3] ここでいう主要部とは，単文の主動詞，及び複文の主節の主動詞であるが，状態変化を表す節が変化とは無関係の内容の節に埋め込まれている場合は，変化を表している節の主動詞かどうかを基準に考える。たとえば「ここで死ぬことより生きることを考えよう」の場合，文全体の主要部は「考えよう」だが，変化を表している節は「ここで死ぬ」であり，その主要部で変化が表されていると考える。また，複合的動詞の場合は，項構造を決めている要素を主要部として扱う。たとえば「たたき殺す」などの複合動詞の場合は，後項動詞が全体の項構造を決めているという分析（影山 1993，Matsumoto 1996a など）に従って，主要部が状態変化を表す例として扱う。「崩御する」のように，項構造を決めている要素を認定できない複合的動詞は，単純動詞と同じように扱う。

として扱った。

b）【主要部外要素のみ】:「きれいに掃除する」のような文の場合，〈清潔化〉は主要部外要素の「きれいに」によって表されている。「掃除する」は，清潔化を目的として行われる行為であり，典型的には結果として清潔化を伴うので，清潔化は予測される変化ではある（McNulty 1988，Kageyama & Shen 2018 参照）。しかし，その変化は常に起こるわけではないので，論理的含意（entailment）ではない（「掃除したことはしたが，きれいになっていない」が可能）。その意味で，「きれいに掃除する」で変化を表しているのは結果句のみであると考え，【主要部外要素のみ】に分類する。「掃除する」における〈清潔化〉は，「掃除する」が論理的に含意する意味内容から，広い意味での文脈（世界に関する知識や話し手の意図の理解）に基づいて推論された内容であると考える[4]。

c）【（主要部と主要部外要素の）両方】:「粉々に砕く」のような場合，主動詞と主要部外要素の両方に，破壊状態への状態変化が含まれている。「赤く染める」の場合も，動詞（主要部）と結果句の両方が状態変化を表している。ただし，動詞は色の変化を含意するが，色は指定されておらず，結果句がその色を指定している。「粉々に砕く」と異なり，両者が含む意味の重なりは限定的だが，ここでは【両方】として扱う。この【両方】と上記の【主要部外要素のみ】の表現はともに結果構文である[5]。

d）【分割】:「赤くなる」「大きくなる」「温かくする」のような場合，「なる」「する」は結果状態への移行を表すが，その状態は特定化されておらず，補語がそれを特定化している。このようなケースを【分割】とする。動詞が結果状態を限定しない一般的な変化動詞であるという点で，【両方】（「粉々に砕く」など）とは異なる。なお，「～の色が赤くなる」「～のサイズが大きくなる」「～の温度が暖かくなる」のように，物体の状態変化を尺度値の変化として表すケース（尺度を主語とするケース）で述部が分割の表現の場合は，この【分割】タイプに準ずる表現とみなした。

e）【間接的表現】：状態変化の表現には，変化主体の変化そのものを直接的に表

---

[4] 語の意味が文脈的柔軟性を持つという想定（Langacker 2005, Recanati 2010）のもとでは，「掃除する」や「洗う」が文脈によって対象の状態変化を意味に含む場合があると考えることも可能である。陳・松本（2018）の枠組みでは，「掃除する」や「洗う」の場合，〈（対象を）きれいにする〉ことは中核的意味ではないが，行為の目的として意味の中に含まれることになる。なお，英語の動詞 clean に関しても，〈清潔化〉の結果を含む意味と，そうではない意味（本稿で言う使役状態変化の手段を表す意味）があるとする研究もあり（Levin and Rappaport Hovav 2014），この問題の難しさを物語っている。

[5] 結果構文に関しては鷲尾の strong resultative と weak resultative の区別が知られている（Washio 1997）。前者は結果句の意味が動詞の意味からは予測できないケース（*run one's shoelace bare* など），後者は，i）結果句の意味が動詞の意味から予測可能であるか（*wash the plate clean* など），ii）動詞の意味に含まれる結果をさらに細かく指定するケース（*smash the glass to pieces* など）をさす。この分類では，strong resultative と weak resultative の i）では動詞が状態変化の意味を含まず，ii）ではそれを含んでいると思われる。したがって，本研究における【主要部外要素のみ】は strong resultative と weak resultative の i）の場合であり，【両方】は weak resultative の ii）の場合ということになる。

す例のほか，メタファーやメトニミーによって間接的にそれを表す表現がある。状態変化を変化主体やその部分の移動によって表す表現や，状態名詞（「死」など）や状態を生じさせる要因を表す名詞（「命」など）が関わる表現などである。下位タイプとしては以下が挙げられる。

〔変化主体の移動〕（〈着座〉:「席につく」など）
〔変化主体部分の使役移動〕（〈着座〉:「腰を下ろす」など）
〔変化主体部分の使役状態変化〕（〈喜悦〉:「胸をときめかせる」など）
〔変化産物の移動〕（〈破壊〉:「破片が飛び散る」など）
〔状態への抽象的移動〕（〈死亡〉:「死に至る」など）
〔状態への抽象的使役移動〕（〈死亡〉:「死に追いやる」など）
〔状態からの抽象的使役移動〕（〈覚醒〉:「眠りから引きずり出す」など）
〔状態の発生〕（〈喜悦〉:「喜びがわき上がる」など）
〔状態の所有経験〕（〈喜悦〉:「喜びを得る」など）
〔状態変化事象の抽象的移動〕（〈死亡〉:「死が訪れる」など）[6]
〔状態変化事象の経験〕（〈死亡〉:「死を迎える」など）
〔状態要因の移動〕（〈清潔化〉:「汚れが落ちる」など）
〔状態要因の抽象的使役移動〕（〈死亡〉:「命を落とす」;〈温度上昇〉:「熱を加える」など）
〔状態要因の使役状態変化〕（〈死亡〉:「息の根を止める」など）
〔状態尺度値の変化〕（〈温度上昇〉:「～の温度が上がる」など）
〔関連位置への抽象的移動〕（〈死亡〉:「天国へ旅立つ」など）
〔関連位置からの抽象的移動〕（〈死亡〉:「この世を去る」など）
〔そのほかの比喩的状態変化〕（〈死亡〉:「永眠する」など）

これらの表現の多くでは移動動詞や状態変化動詞が使われている。それに注目することにより，【間接的表現】はさらに，その中の主動詞が移動の経路あるいは状態変化を表しているかどうかによって,【間接的表現（主要部)】と【間接的表現（そのほか)】に分類できる。経路動詞が主動詞の場合，位置変化が主要部で表されていることになる。

f)【共イベントによる推論のみ】：先に述べたように,「掃除する」は〈清潔化〉を論理的に含意しないが，それを目的とした行為を表す。実際の用例の中で,「きれいに」のような結果句を伴わずに,「掃除する」のみで清潔な状態への変化を推

[6]「死」という名詞には〈死んでいる〉状態を表す意味と,〈死ぬ〉という状態変化（事象）を表す意味があり,「死が訪れる」などの場合どちらなのか, 判断が難しい場合がある。「訪れる」という動詞の場合,「そんな状態が訪れる」よりも「そんな変化が訪れる」の方が自然なので, 主語は状態の解釈よりも状態変化（あるいは事象一般）の解釈の方が優勢であると考えられる。このため,「死が訪れる」の「死」は状態ではなく状態変化（事象）を表していると見なす。同様のテストから,「死を迎える」の場合は「死」が状態変化（事象）を,「死に至る」「死に追いやる」の場合は「死」が状態を表すと考える。

論を介して伝える場合は，「掃除する」の表す行為は〈清潔化〉の共イベントであるので，【共イベントによる推論のみ】として分類する。

以上のうち，主要部が状態変化かその一部（移行）を表しているのは【主要部のみ】【主要部のみ（状態変化事象部分）】【主要部のみ（身体部位 / 尺度）】【両方】【分割】【間接的表現（主要部）】であり，その合計の頻度が高い言語は，「変化主要部表示型言語」と呼ぶことができる。一方，主要部外の要素が変化かその一部を表しているのは【両方】【分割】【主要部外要素のみ】であり，その頻度の合計が高い言語は,「変化主要部外表示型言語」であると言える。注意すべき点は,【両方】【分割】は主要部と主要部外要素の両方が変化かその一部を表しているので，両方の型の文として数えられる点である。なお，小野（2004）は【分割】のケースを付随要素枠付けとして扱っている。この点で，この論文での【分割】のケースの扱いは，小野のものとは異なる。

本研究ではさらに，変化表示位置に関して，言語内でどのような変異が見られるかを考察する。変異の要因として，状態変化の種類および共イベントの有無に着目する。移動の表現に関しては，経路の種類によって経路表現位置が変わることが知られている（Matsumoto To appear を参照）。移動の場合に経路表現位置を左右するのは，経路が上下方向かどうか，境界越えがあるかどうかなどである。状態変化の場合は，変化の結果状態が，必ず変化によって生じる状態か，などに着目する。また移動の表現に関しては，共イベントである様態の表現の有無が経路表示位置に影響を与えるとする諸言語における観察がある（たとえば Ito 2018，Nagaya To appear）。状態変化についても，伊藤が英語の〈死亡〉の表現において，共イベントがある場合には（2b）のように変化が主要部外要素で表され，それがない場合には（3）のように変化が主動詞で表される傾向を指摘している（Ito 2018）。日本語でも同じ傾向が見られるかどうかが一つの研究課題となる。

4. 全体的な結果

4.1. 全体的な傾向

まず，12 の状態変化における変化表示位置の全体的傾向を，自己状態変化と使役状態変化に分けて図 1 に示す。ここでは，得られた表現を,【主要部のみ】と【間接的表現】の下位タイプを含む 9 タイプに分けて示している。12 の状態変化に関わる表現の数が異なるため，ここでは，自己状態変化と使役状態変化それぞれで，12 の状態変化の各変化表示位置の割合（次節の図 2 と図 3）を平均した値を示している。

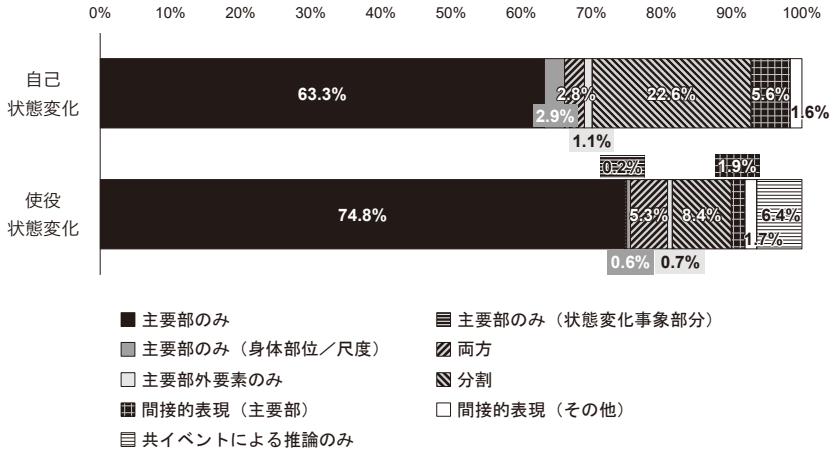

図 1　12 の状態変化の表現における変化表示位置（平均）

この図が示すとおり，もっともよく使われるのは【主要部のみ】であり，自己状態変化では【主要部のみ（身体部位／尺度）】と合わせると 66.2%，使役状態変化で【主要部のみ（状態変化事象部分）】【主要部のみ（身体部位／尺度）】を合わせると 75.6% を占める。その次に多いのが【分割】タイプである。【主要部外要素のみ】は非常に少ない。【主要部のみ】【主要部のみ（状態変化事象部分）】【主要部のみ（身体部位／尺度）】【両方】【分割】【間接的表現（主要部）】では，主要部が状態変化の少なくとも一部を表している。これらを合計すると，自己状態変化と使役状態変化でそれぞれ 97.3% と 91.2% に上る。一方，主要部外要素が関わる文（【両方】【主要部外要素のみ】【分割】）の合計は，自己状態変化と使役状態変化でそれぞれ 26.6% と 14.4% である。全体としては，自己状態変化と使役状態変化の間には大きな差はないが，自己状態変化の方が【分割】の割合が高い。

一つ興味深い点は，共イベント（自己状態変化の原因や使役状態変化の手段など）の表現が，状態変化と共起する頻度である [7]。今回の 12 の状態変化のデータでは，共イベントの共起率は自己状態変化と使役状態変化それぞれ平均で 11.0% と 13.3% に過ぎなかった。使役状態変化表現における共イベントの共起率の低さは，河内らも指摘している（Kawachi et al 2018）[8]。このことは，タルミーのように考察の範囲

[7]〈（ドアなどの）開放〉や〈着座〉などの一部の状態変化は，変化主体（の部分）の移動を含んでいる（Iwata 2008 参照）。そのため，「ドアが勢いよく開いた」のように，移動の様態が共イベントになる場合もある。

[8] 河内らの研究はビデオを描写してもらうもので，そのように具体的な使役手段が映像的に提示されている場合は，コーパスの場合よりも使役手段の言語化の頻度が高いことが予想される（松本 2021）。それにも関わらず，河内らの調査結果で共イベントの率が低かったことは興味深い。なお，河内らは，共イベントが状態変化の使役手段（河内らの用語では原因）であることが明示的に示されているかそうでないかを分けて集計しているが，ここではそのような区別を行っていない。

を限定した場合，大多数の状態変化表現が考察から抜け落ちてしまうことを示している。特に複合動詞前項が共イベントを表す例は，自己状態変化と使役状態変化それぞれで 12 の状態変化の平均で 0.03% と 3.85% であった。複合動詞を中心に状態変化の表現を議論するのは，ごく一部の表現に基づいた議論であることになる。

4.2. 状態変化の種類と変化の表示位置

12 の状態変化の間には差は見られるであろうか。12 の状態変化について，自己状態変化と使役状態変化に分けて，変化表示位置の頻度を示したのが図 2 と図 3 である。【主要部のみ】と【主要部のみ（身体部位・尺度）】を合算した比率が高い順に並べている。数字は用例数である。

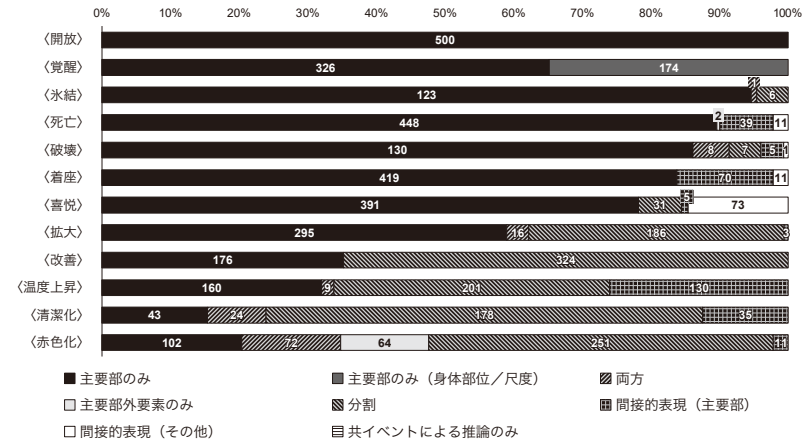

図 2　12 種類の変化を表す自己状態変化表現における変化表示位置

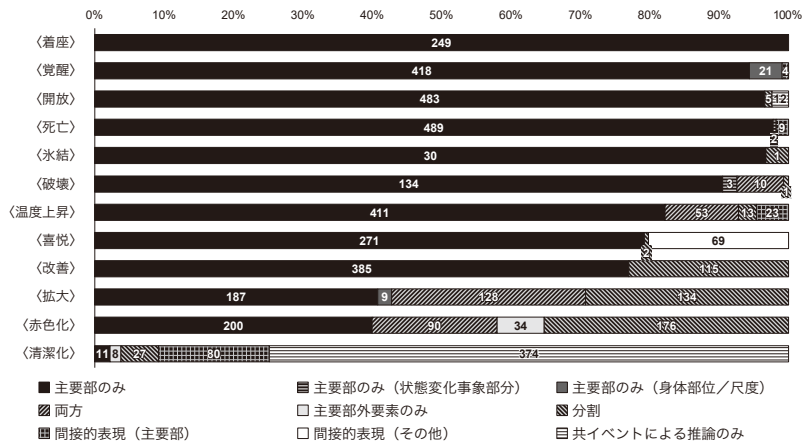

図 3　12 種類の変化を表す使役状態変化表現における変化表示位置

図が示すとおり，変化の種類によって，変化表現位置のパターンに大きな違いがある。【主要部のみ】（使役状態変化における状態変化事象部分の表現や，身体部位・尺度などの変化の表現を含む）が使われる比率に関して 12 の変化の差をカイ二乗検定で調べると，自己状態変化で χ^2 (11)=2048.6, p<.0001，使役状態変化で χ^2 (11)=1833.2, p<.0001 で有意であった。【主要部のみ】が使われることが多い変化は，自己状態変化，使役状態変化とも，〈着座〉〈覚醒〉〈死亡〉〈開放〉〈氷結〉〈破壊〉〈喜悦〉である。【分割】がかなりの頻度で使われているのは，自己状態変化では〈赤色化〉〈清潔化〉〈改善〉〈拡大〉，使役状態変化では〈赤色化〉〈拡大〉であった。結果構文（【主要部外要素のみ】【両方】）も，使役状態変化で〈赤色化〉〈拡大〉などで使われている。〈清潔化〉については使役状態変化において【共イベントによる推論のみ】が多いのが特徴である。【主要部のみ】がどのような種類の状態変化に使われるのか（〈着座〉〈覚醒〉〈死亡〉〈開放〉〈氷結〉〈破壊〉〈喜悦〉などの共通性は何か）は興味深い課題である。この点については，次節で 4 つの状態変化の表現を詳しく見た後，6.2 節で考察する。

5. 状態変化の種類ごとの特徴

以下では，12 の状態変化に見られる異なる表現パターンを代表させる形で，〈死亡〉〈覚醒〉〈温度上昇〉〈清潔化〉の 4 つの状態変化の表現を取り上げる。

5.1.〈死亡〉

〈死亡〉は，【主要部のみ】での状態変化表現が圧倒的に多い状態変化の一つである。図 2，3 の〈死亡〉の横棒に示した 500 例に含まれているのは，以下の表現である（検索対象ではあってもサンプリングにより抽出された 500 例に含まれていないものは載せていない）[9]。

自己状態変化

【主要部のみ】：死ぬ，亡くなる，くたばる，没する，絶命する，崩御する，死亡する，死去する，戦死する，病死する，餓死する，溺死する，凍死する，急死する，即死する，飢え死にする，焼け死ぬ，溺れ死ぬ

【主要部外要素のみ】：死に絶える

【間接的表現（主要部）】：〔状態への抽象的移動〕死に至る；〔状態要因の使役移動〕命を落とす，息を引き取る；〔状態要因の所有・経験〕命を失う；〔状態要因の使役状態変化〕天寿を全うする，命を絶つ；〔関連位置からの抽象的移動〕（この）世を去る；〔関連位置への抽象的移動〕他界する，逝く；

【間接的表現（そのほか）】：〔状態変化事象の経験〕死を迎える，死を遂げる，最期を迎える；〔そのほかの比喩的状態変化〕永眠する

[9]「帰らぬ人となる」「三途の川を渡る」「天に召される」などである。「死んでいる」が単なる状態を表す例（「その人は生きているか死んでいるか」など）は含めていない。

使役状態変化

【主要部のみ】:殺す;撃ち殺す，殴り殺す，轢き殺す，刺し殺す，切り殺す，締め殺す，食い殺す，焼き殺す，ぶっ殺す;射殺する，銃殺する，刺殺する，斬殺する，絞殺する，毒殺する，虐殺する，惨殺する，暗殺する，抹殺する，殺害する

【主要部のみ（状態変化事象部分)】:（噛まれて／食べられて）死ぬ

【間接的表現（主要部)】:〔状態への抽象的使役移動〕死に追いやる；〔状態要因の使役移動〕命を奪う；〔状態要因の使役状態変化〕息の根を止める

【主要部外要素のみ】としたのは「死に絶える」のみで，これも別の状態変化動詞が主要部に置かれた例である。〈死亡〉に関しては，多くの言語で間接的表現（メタファーとメトニミー）の種類が多いことが知られているが（Wachowski and Sullivan 2022），日本語ではその使用割合は高くない。

〈死亡〉で共イベントが表される率は，自己状態変化で 14.4%，使役状態変化で 21.2% であった。さらに，共イベントが表現されているケースと表現されていないケースで変化表示位置の差を見ると，図 4 に示すとおりとなった。共イベントの有無で統計的に違いはなかった（【主要部のみ】とそれ以外でカイ二乗検定（イエーツの修正式を使用）を行うと，自己状態変化で χ^2 (1)=0.00, p=.996，使役状態変化で χ^2 (1)=0.237, p=.626 であった)。共イベントは複合動詞前項（「絞め殺す」など)，後置詞句（「栄養失調で死ぬ」)，従属節（「小競り合いにまきこまれて死んだ」）などの主要部外の要素で表されるため，これらがあってもなくても「死ぬ」「殺す」が基本的に主要部に置かれる。そのため，共イベントの有無で変化表示位置に差が生じないと考えられる。英語の strike him dead のように，共イベントを表す動詞を主動詞にして〈死亡〉を主要部外で表す例がないので，共イベントがあると【主要部外要素のみ】が多くなるという傾向は見られない。

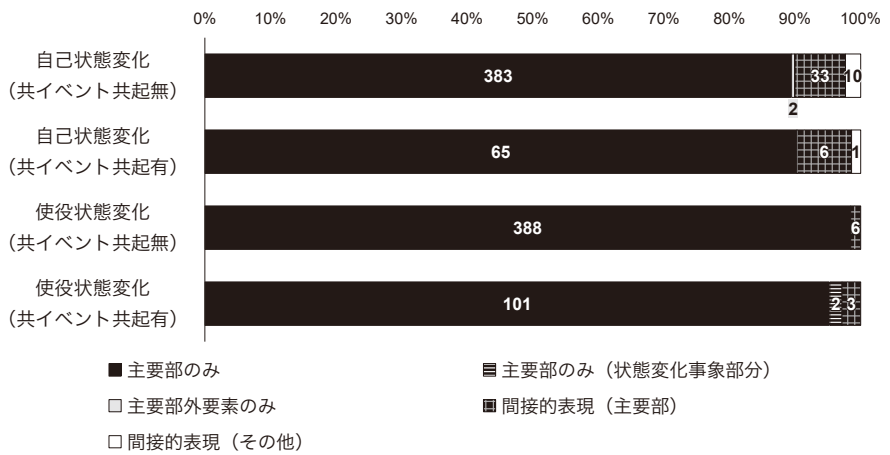

図 4　〈死亡〉における共イベントの共起と変化表示位置

このように〈死亡〉において【主要部のみ】が圧倒的に多い理由としては，日本語には〈死んでいる〉ことを表す形容詞がないことが挙げられる。このため,【分割】タイプの表現や, 形容詞連用形を用いる結果構文（【両方】や【主要部外要素のみ】）が不可能である。そのため，【間接的表現】以外はほぼすべて【主要部のみ】の文になる。

5.2.〈覚醒〉

〈覚醒〉を表す表現としては以下を含めている[10]。

自己状態変化

【主要部のみ】：目覚める，覚醒する，起きる，起床する
【主要部のみ（身体部位／尺度）】：目が覚める，目を覚ます
【両方】：眠り（など）から覚める

使役状態変化

【主要部のみ】：覚ます，起こす，叩き起こす，揺り起こす，呼び起こす
【主要部のみ（身体部位／尺度）】：（他人の）目を覚ます
【両方】：眠りから起こす
【間接的表現（主要部）】：〔状態からの抽象的使役移動〕眠りから｛引きずり出す／引き離す／ほか｝

図 2，3 に示した〈覚醒〉の結果から分かるように，〈覚醒〉においても【主要部のみ】の使用が多い。一つ〈死亡〉などと異なるのは，身体部位の状態変化・使役状態変化によって自己状態変化を表現している例が少なからずあることである。「目が覚める」「目を覚ます」がそうである。（「目を覚ます」では使役状態変化動詞が使われているが，ほとんどの場合，覚ますのは自分の目であり，全体としては目の所有者の覚醒状態の変化を表している。したがって，他の人の目を覚ます場合を除いて自己状態変化の表現として扱う）。このように，身体部位を用いた人間の状態変化の表現は,〈着座〉を表す「腰をかける／腰を下ろす」や,〈喜悦〉を表す「胸を躍らせる」などがある。このような表現は今回の調査対象外の変化においても，「喉が渇く」「腹が減る」「腹が立つ」「頭が良くなる」等にも見られる。他の言語と比べて日本語に多い表現と言えるかどうか，詳細な研究が待たれる（有薗 2009 なども参照）。

【主要部のみ】が多い理由としては，日本語には〈目が覚めている〉状態を表す形容詞がなく，結果構文や【分割】の表現ができないことが指摘できる。

---

[10]「起きる」「起こす」の用例のうち，姿勢の変化のみを表すものは含めていない。姿勢の変化と覚醒は時間的に隣接的に起こるため，両方を合わせて表現していると思われる場合は含めている。「ベッドから」などがある場合は姿勢の変化と見なした。

5.3.〈温度上昇〉

図 2，3 で〈温度上昇〉を表す表現には以下を含めている。

自己状態変化

【主要部のみ】：温（あたた）まる，温（ぬく）まる，温（ぬく）もる，火照る，ぽかぽかする，ほかほかする

【分割】：｛温かく／暖かく／ぽかぽかに｝なる，｛熱く／暑く｝なる

【分割（身体部位・尺度）】：｛温度／気温／体温｝が高くなる

【両方】：熱く火照る，ほかほか温もる

【間接的表現（主要部）】：〔状態要因の移動〕熱が出る，〔状態要因の所有〕熱を帯びる，〔状態尺度値の変化〕｛温度／気温／体温｝が上がる／高くなる

使役状態変化

【主要部のみ】：温（あたた）める，温（ぬく）める，加熱する，熱する

【主要部のみ（身体部位・尺度）】：｛温度／気温／体温｝を温める

【分割】：｛温かく／暖かく／ぽかぽかに｝する，｛熱く／暑く｝する

【両方】：｛高温に／中温に／～ ℃ に｝温める，高温に熱する

【間接的表現（主要部）】：〔状態要因の使役移動〕熱を加える，〔状態尺度値の使役変化〕｛温度／気温／体温｝を上げる／高くする

温度に関しては，状態変化を表す動詞があるほか，温度が高い状態を表す形容詞があるため，多様な選択肢がある。図 2，3 の〈温度上昇〉の横棒に示されているように，使役状態変化では【主要部のみ】が圧倒的に多いが，自己状態変化では【分割】が多く見られる。使役状態変化において【主要部のみ】を使った表現が多いのは，使役状態変化では料理における加熱の文が多く（58.2%），それらうちの 82.2% が「加熱する」「温める」などの動詞による【主要部のみ】の表現であることが理由と思われる。

自己状態変化においては，【主要部のみ】と【分割】の両方が見られる。どちらが選択されるかには，温度の種類による差が見られる。ここでは，物体の温度，天候・環境の温度（天候としての温度や部屋などの温度），身体（身体部位を含む）の温度の 3 つに分けて考察する。この 3 つの分類は，コプチェフスカヤ - タムの温度表現（温度変化の表現ではなく，状態としての温度の表現）の研究における，触覚（tactile），周囲（ambient），個人的感覚（personal feeling）の 3 つに相当する（Koptjevskaja-Tamm 2015, 2022）。この 3 つにおいてどの位置で変化が表示されているかを示したのが図 5 である。

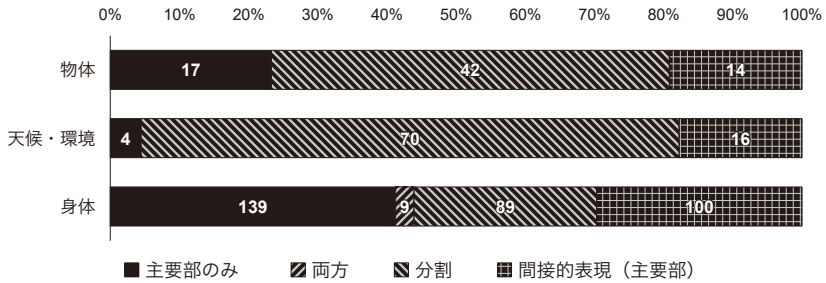

図 5　温度の種類と〈温度上昇〉の自己状態変化表現における変化表示位置

この図から分かるように，身体の温度上昇は【主要部のみ】で表現される場合が多い。(6) のような例である。(6a) では「温かくなる」が使いにくい。(6b) の「ほてる」は身体にしか使えない動詞である。

(6)　a.　ゆっくりと風呂につかって温まると　　（いとうせいこう『見仏記』）
　　b.　「これは違う。もう一度書き直して来なさい」などと言われ，きまり悪さで顔がほてり，身体も震えてしまう。　　（佐伯順子『一葉語録』）

温度変化の文を【主要部のみ】（身体部位／尺度値の変化を含む）とそれ以外に分けて，3 種類の温度変化の差をカイ二乗検定で調べると，χ^2 (2)=47.19, p<.001 で有意であった。残差分析を行うと，身体で【主要部のみ】が有意に多く，天候・環境ではそれが少なかった（p<.001）。

この結果は，コプチェフスカヤ - タムの観察と通じるところがある。彼女によれば，温度状態の記述において，物体の温度には単純な形容詞を用いる言語でも，個人的感覚の温度表現においてはそれ以外の多様な表現をとる場合があり，動詞を用いる言語もあるという（Koptjevskaja-Tamm 2022）。

5.4.〈清潔化〉

図 2，3 で，〈清潔化〉を表す表現には以下を含めている [11]。

自己状態変化

【主要部のみ】：（場所が）片付く
【分割】：きれいになる，ぴかぴかになる
【両方】：｛きれいに／きちんと｝片付く
【間接的表現（主要部）】：〔状態要因の移動〕（汚れ等が）落ちる

[11] 容姿の変化を表す「きれいになる」は含めていない。

使役状態変化

【主要部のみ】：（場所を）片付ける

【分割】：きれいにする，ピカピカにする

【主要部外要素のみ】：きれいに｛洗う，拭く，磨く，掃除する｝；ピカピカに磨く

【間接的表現（主要部）】〔状態要因の使役移動〕：（汚れ，垢，埃，泥，汗等を）｛落とす／取る／洗い落とす／拭き取る／拭い取る／取り除く｝，（不要物を）片付ける

【間接的表現（その他）】〔状態要因の使役移動〕：（汚れ，垢，埃，泥，汗等を）｛拭く／流す／洗い流す｝

【共イベントによる推論のみ】：洗う，拭く，磨く，掃除する，洗濯する

〈清潔化〉は，他の変化とは大きく異なる傾向を示す。まずは主動詞による表現が少ないことが挙げられる。これは，日本語で清潔化を直接的に表す動詞として「片付く」「片付ける」があるのみで，「汚れる」の反義語に当たる一般的な単純動詞がないためだと考えられる（「清める」が表すのは清潔化とは異なると考え，ここではこの動詞を含めていない）。その代わりに見られるのが，自己状態変化では「きれいに」などを用いた【分割】の表現であり，使役状態変化では【共イベントによる推論のみ】と【間接的表現（主要部）】である。【分割】の例を（7a）に挙げる。【共イベントによる推論のみ】とは，（7b）のように「洗う」などの動詞による表現であり，【間接的表現（主要部）】とは，（7c）のように，清潔性を左右する要因である〈汚れ等〉（状態要因）の使役移動によって，メトニミー的に清潔化を表現するものである（Langacker 1995 参照）。

（7）　a.　川はだんだんきれいになっているように思う。
（実著者不明『みんなでホタルダス』）

b.　ついでに汚れた灰皿や，醤油皿も洗ってやる。
（志水辰夫『殺ったのは誰だ？！』）

c.　手で充分にもんでよごれやぬめりを取り
（志の島忠『酢のものあえものおひたしサラダ』）

このほか，頻度はあまり高くないが，「きれいに」などを用いた結果構文（【両方】の「きれいに片付く」，【主要部外要素のみ】の「きれいに洗う」など）が見られた[12]。

[12]「きれいに」に関しては（i），（ii）のように，目的語の清潔性の変化を表しているのではない例がある。結果句が目的語の状態を表すものとすれば（Simpson 1983, Levin and Rappaport Hovav 1995），これは結果構文ではないということになる。この「きれいに」は，物が無くなる過程に関して使われる〈残りがないように〉という意味の副詞と思われる。これらの例では，この副詞が単独で清潔性を表しているのではないと考える。

（i）水気を雑巾で綺麗に拭き取った　（古処誠二『未完成』）

（ii）パンを皿につけてソースをぬぐいながらきれいに食べる
（板橋さとこ『ソース・たれ・ドレッシング』）

なお,「片付ける」は場所目的語（「部屋を片付ける」など）と移動物目的語（「ゴミを片付ける」など）の両方を許す動詞であるが（岸本 2001, 川野 2021 など参照），場所目的語の場合は【主要部のみ】, 移動物目的語の場合は【間接的表現（主要部）】の〔状態要因の使役移動〕のケースである。

〈清潔化〉でもう一つ特徴的な点として，〈死亡〉の場合と異なり，状態変化と共イベントが一緒に表現される場合の表現パターンが，共イベントが共起しない場合と一部異なることが挙げられる。状態変化と共イベントが表現された場合と，状態変化のみが表現された場合に分けて，変化表示位置の比率を見ると図 6 のようになる。使役状態変化において差が大きい[13]。

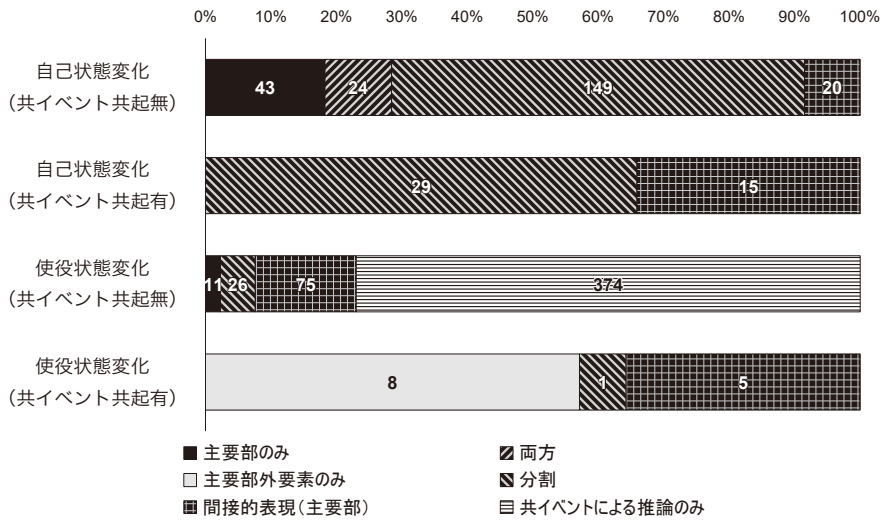

図 6　〈清潔化〉の表現における共イベントの共起と変化表示位置

状態変化表現が使役状態変化の手段の表現と共起している例を（8）に挙げる。結果構文が使われていて, 状態変化は【主要部外要素のみ】で表されている（「洗う」では変化が示唆されているのみなので，ここでは【両方】とは見なしていない）。

（8）　鍋をきれいに洗ってスペアリブを戻し，…

（分担不明『アジアのお母さんの味』）

3.2 節で指摘したように，英語においては共イベントの有無が変化の表示位置に

なお，（8）のように目的語の状態について使われている「きれいに」も副詞である可能性がある（仁田 1983，Matsumoto 1996a: 60–61）。しかしそうであっても，目的語の変化の結果を表していると考えられることから，【主要部外要素のみ】の例として扱う。

[13]【共イベントによる推論のみ】の文は，状態変化が論理的に含意されていない（表現されていない）ため，状態変化と共イベントの共起がないとみなし，図 6 には含められていない。

影響を与えることが知られている。〈清潔化〉の例から，日本語でも，結果構文が可能な状態変化の表現においては，同様の現象が見られることが分かる。

6. 考察

6.1. 変異

日本語で変化が表される位置については，全体的傾向としては【主要部のみ】が圧倒的に多いが，状態変化の種類によっては異なるパターンを示す場合があることを見た。〈着座〉〈覚醒〉〈死亡〉〈(物理的〉破壊〉，〈(ドアなどの）開放〉，〈氷結〉〈喜悦〉においては【主要部のみ】での表現が圧倒的であり，〈赤色化〉〈清潔化〉〈(物理的）拡大〉〈温度上昇〉〈改善〉においては【分割】の表現が多かった。

これは，状態変化について，【主要部のみ】の表現がどの程度用いられるかについて，状態間での種類の差，あるいはハイアラキーがあることを示している。同様の研究を他の言語で行った場合，同じ通言語的な傾向を認めることができるのかどうかは，興味深い研究課題となる。

日本語において【主要部のみ】になるかどうかを決める重要な要因として，語彙レパートリーがある。特定の状態変化を表す動詞や，特定の状態を表す形容詞が存在しているかどうかが，変化の表示位置と関連するからである。この点に関して，日本語では他の言語と比較して，状態を表す形容詞の数が限定的であることがしばしば指摘される（玉村 1975，村木 2019 など)。たとえば，以下の変化の結果状態については，形容詞がないか，あったとしても用法が限られており，動詞のテイル形などを使って表すのが一般的である。

(9)　〈死（状態)〉:「死んでいる」，〈高齢〉:「年を取っている」，〈妊娠〉:「妊娠している」，〈疲労〉:「疲れている」，〈覚醒状態〉:「目覚めている」，〈怒り〉:「怒っている」，〈驚き〉:「驚いている」，〈酔い〉:「酔っている」，〈太り〉:「太っている」，〈無髪状態〉:「禿げている」，〈破壊状態〉:「壊れている」，〈氷結状態〉:「凍っている」，〈開き〉:「開いている」，〈閉じ〉:「閉じている」，〈乾燥〉:「乾いている」，〈湿り〉:「湿っている」「濡れている」，〈曇り〉:「曇っている」，〈湾曲〉:「曲がっている」，〈誤り〉:「間違っている」，〈相違〉:「異なっている」

これらの状態については，5 節で〈死亡〉〈覚醒〉について指摘したとおり，状態変化を表すのに形容詞を使った【分割】や結果構文の表現が不可能であるか限定的である（そればかりか，結果状態の方を動詞を使って表現しなければならない)。そのため，変化を表すには動詞がほぼ独占的に使われることになる。

その一方，(10）の概念については，状態変化を表す一般的な動詞がない。

(10)　〈清潔〉:「きれいな」，〈平ら〉:「平らな」，〈高濃度〉「濃い」

そのため，これらの状態への変化を表すには【分割】などの表現に頼ることになるのである。

6.2. 状態の結果性と逸脱性

主要部で状態変化を表示するかどうかが，形容詞・動詞のレパートリーによることだとすれば，さらに新しい研究課題が生まれる。日本語はどのような状態・状態変化を形容詞を用いて表し，どのような状態・状態変化を動詞を使って表すかである。一般的な形容詞が存在しない（9）の概念は，i）必ず変化によって生じる状態であるか，ii）通常の状態あるいは理想的な状態から逸脱した状態であるという共通点がある。i）には〈湿っている〉などの，変化によって生じる一時的（可逆的）状態や，〈死んでいる〉などの，変化によって生じる持続的（非可逆的）状態が含まれ，ii）には〈間違っている〉〈異なっている〉が含まれる。〈疲れている〉〈酔っている〉〈壊れている〉〈凍っている〉は，変化の結果生じる，通常の状態から逸脱した状態であり，i），ii）両方の側面を持つ。一般的な形容詞で表される，色，大きさなどの概念はこの点で異なる。物体の色や大きさは，必ずしも変化の結果として決まるものではない。なお，理想的な状態からの逸脱を変化の結果として表すことは，主体的変化とよばれる現象（「角が落ちた四角」; Matsumoto 1996b）につながるものである[14]。

日本語でどの概念が形容詞・動詞で表現されやすいかについては，通言語的な傾向とからめて考察することができる。この点では，ディクソンの研究（Dixon 1982, 1991, 2004）とビーバーズらの研究（Beavers and Koontz-Garboden 2020, Beavers et al. 2021）が参考になる。ディクソンは，英語の形容詞を概念的に分類し，a）次元（big, long など），b）年（new, young, old など），c）価値（good, proper など）d）色（red, black など），e）物理的性質（hard, heavy, wet など），f）人間の傾向（happy, smart など），g）スピード（fast, slow など）に分ける。さらに通言語的な考察を行い，次元，年齢，価値，色は，形容詞が少ない言語でも形容詞で表される傾向があるのに対し，物理的性質は言語によっては動詞，人間の傾向は名詞でも表されると指摘している（Dixon 1982, 1991, 2004）。また，人間の傾向については変化を表す動詞が形容詞から派生しないとしている。この分類の観点から日本語を考察すると，確かに次元や色に関しては日本語でも形容詞が実現していて，状態変化も形容詞を用いて表すことが多いと言える。しかし，年齢については日本語で状態変化を動詞で表し，〈高齢〉を動詞の結果形で表すため，ディクソンの主張する傾向と一致しない。また形容詞の分類であるため，〈破壊〉などの概念が含まれておらず，この分類のみで日本語の表現パターンを議論するのは難しい。

---

[14] 変化の結果生じる状態とは，Carlson（1980）の用語で言えばステージレベル述語の表す状態であり，Croft（2012: 57）の用語では「一時的状態（transitory state）」と「獲得された恒常的状態（acquired permanent state）」ということになる。なお，一時性と関連して，恒常的な状態と一時的な状態を，それぞれ「特性（property）」と「状態（state）」として区別する場合がある（Croft 1991: Ch. 2, 八亀 2008 など）。後者の一部は言語によっては動詞で表されることが知られており（Croft 1991: Ch. 2, Reznikova, Panina, and Kruglyakova 2022），日本語の一部の方言でもその傾向が見られる（八亀 2004，工藤 2007）。これは，（9）のような動詞の結果形とは限らない。

ビーバーズとクーンツ・ガーボデンは，英語の状態変化動詞に，状態を表す形容詞語根から派生した形容詞由来動詞（flatten, enlarge など）と，そうではない非形容詞由来動詞（crack, burn など）があるとし，その二つの意味的な違いを考察して，理論的な議論を展開している（Beavers and Koontz-Garboden 2020）。本論と関わるのは主に両者の意味的・形態的な違いに関する一般化である。ビーバーズとクーンツ・ガーボデンは，形容詞由来動詞は，結果状態がディクソンの次元，価値，色などの特性概念である一方，非形容詞由来動詞は，結果状態が，変化を含意する（＝必ず変化によって生じる）状態であるとする[15]。ビーバーズらはさらに，これらの二種類の状態／状態変化が諸言語でどのように表現されるかを研究している（Beavers et al. 2021）。その結果，特性概念については状態を表す形容詞が形態論的に無標で，状態変化を表す動詞が有標である傾向がある一方，必ず変化によって生じる状態概念の場合は，結果状態を表す形容詞が有標（動詞由来）である傾向があることを指摘している。さらに，それらの傾向の例外についても考察し，年齢の概念領域の中でも〈高齢〉に関する表現はむしろ，必ず変化によって生じる状態が関わる場合と似た傾向を示すという。ビーバーズらの研究は，状態の結果性が状態変化を表す形式と関連していることを指摘している点，また，〈高齢〉について，日本語でそれを表す一般的形容詞が実現していないことと一致する指摘を行っている点で興味深い。日本語で見た，状態変化を動詞を使って表すか，形容詞を使って表すかを左右する要因は，諸言語における形容詞・動詞の形態論的有標性を説明するパラメターと共通している可能性がある。そうだとすれば，日本語で見た状態変化の種類による変異は，通言語的な傾向を反映していることになる。ただし，ビーバーズらが特性概念としているものの中にも，〈乾燥〉〈湿り〉など日本語では形容詞で表現できないものがあり（Reznikova, Panina and Kruglyakova 2022 も参照），日本語で動詞を使う傾向はビーバーズらが特性概念としている概念領域の一部にも及んでいるように思われる。

6.3. 有生性

この節では，動詞を使うか形容詞を使うかという選択と関わる可能性がある意味的要因として，有生性について考察する。今回の 12 の状態変化において〈死亡〉〈覚醒〉〈着座〉〈喜悦〉の 4 つが有生物の状態変化であるが，これらにおける状態変化の表示位置は【主要部のみ】が圧倒的に多い（身体部位の変化として表現されている例を含む）。その一方で形容詞を用いた【分割】はほとんど見られない。また，有生物と無生物の両方に当てはまる変化においても有生性による違いが見られた。〈温度上昇〉については全体的に形容詞を用いた表現が多いものの，5.3 で論じたよ

[15] ビーバーズらは，ここで結果状態と呼んでいるものを意味的語根（semantic root）だとし，形容詞由来動詞は特性概念語根を持ち，非形容詞由来動詞は結果語根を持つとする。しかし，語根という用語からは形態論的な語根を思い浮かべることが多いため，この論文ではこの用語を避ける。

うに，身体が変化主体の場合はそれ以外の場合よりも【主要部のみ】が使われることが多い。なお，無生物の状態変化は種類による差があり，主要部が圧倒的なものもある。つまり，今回の調査の範囲では，有生物の変化には動詞が使われやすいとは言えるが，無生物については場合によるということになる。

この有生性に関する結果は，有生性自体が重要なのではなく，有生物の状態変化が，結果性の高い状態への変化が多いことを反映していると考えた方が良さそうである。〈死亡〉〈覚醒〉〈着座〉〈喜悦〉では，生じる状態が必ず変化の結果起こる状態である。そのため，形容詞が存在しない場合があり，変化を表すには動詞を使った表現が多いということである。〈着座〉については，行為によって起こる状態変化であるという側面もあり，動詞が好まれるのだと思われる。また，〈温度上昇〉においては，有生物の変化の場合に動詞の使用が多いことを見たが，身体の温度の上昇については，入浴，発熱，興奮，感情変化のために平熱（通常の体温）から上昇する場合が多く，その場合は，結果性・逸脱性の高い状態への変化であると言える。

実際のところ，人間の状態・特性でも（性格や社会的特性など）容易に変化しないものもあり，その変化を表す場合は形容詞（形容動詞を含む）を使った表現が多い（「裕福だ／裕福になる」「親切だ／親切になる」など）。このことは，変化の結果性の方が重要な要因であるという考えを支持する。

なお，村木（2019）は日本語とドイツ語の比較から，日本語においては身体，生命，健康の領域で形容詞が少ないことを指摘している。これは（9）のリストにも反映されている。身体，生命，健康に関する人間の状態は変化によって生じる場合が多いと考えられ，この概念領域で形容詞が少ないことは，ここで考察している状態の結果性・逸脱性の反映と考えられる。

6.4. 移動表現との比較

この調査の結果から，日本語の状態変化表現において状態変化は主動詞で表されることが圧倒的に多く（自己状態変化と使役状態変化でそれぞれ 97.3% と 91.2%），日本語が変化主要部表示型であることが分かる。特に【主要部のみ】での表示が多い。この結果は，移動事象の表現における経路表示位置を分析した松本（2017b）の結果と比べることができる。松本（2017b）が BCCWJ（デモ版）の書籍サブコーパスの一部を検索した結果では，主要部で経路を表示する例が全自己移動表現（松本 2017b の主体移動表現）の 51.7% であり，【主要部のみ】の例が 28.6%，【両方】（主要部と後置詞）の例が 23.1% であった。図 1 の自己状態変化と比べて，【主要部のみ】が少なく，【両方】が多い。これは，経路に直示を含めない場合の数字である。それを含めて，主要部で経路か直示を表示する例を数えても，全移動表現の 90.9% であり，自己状態変化表現の 97.3% には及ばない。松本（2017b）と本研究ではいくつかの点でデータの扱いが異なるため，単純な比較はできないが，移動よりも状態変化の方が，より純粋な主要部表示型であるとは言えると思われる。

2.1 節で指摘したように，英語においても，移動よりも状態変化の表現で主要部表示が幅広く見られる。通言語的傾向として，状態変化の表現の方が移動の表現よりも主動詞への依存が高いと言えるかどうかについては，他の言語の研究が待たれるところである。

移動と状態変化における【両方】の使用率の違いについては，以下の点が理由の一つとして考えられる。移動表現で，経路を主要部とそれ以外で表示するケースとして（11a）のような例がある。この例では，動詞「入る」が，〈内側へ〉という経路の意味を含んでいるが，何の内側への移動であるかを示すためには名詞句が必要であり，それに付加された後置詞によって着点であることが表示される。「入る」ではこのような着点句が文法的に必須の項である。

（11）　a.　部屋（の中）に入った
　　b.　粉々に壊れた

一方状態変化の（11b）の「壊れる」では，動詞が移行と具体的結果状態を含んでおり，「粉々に」のような結果句によってさらなる描写をしても良いが，それは文法的に必須ではない付加詞である。空間移動と比較して状態変化において【両方】が少ないのは，このような経路句と結果句の必須性の違いが一因となっていると考えられる。

7. まとめ

本稿では，幅広い種類の状態変化を表す表現についてコーパスを用いて数量的研究を行い，その結果から，日本語の状態変化の表現について以下のことを明らかにした。全体的傾向として，日本語では文の主要部で状態変化（移行のみを含む）を表す場合が圧倒的に多く，特に移行と結果状態の両方を主要部のみで表す場合が多い。したがって，日本語は変化主要部表示型言語であると言える。この点で，空間移動の表現が主として経路主要部表示型の表現を取るのと似ているが，状態変化の表現の方が主要部のみを用いる例が多く，主要部の役割が大きいと言える。また，変化を表現するのに主要部を用いるかどうかには，状態変化の種類によって大きな違いが見出される。その変異を生む要因としては，動詞や形容詞のレパートリーが考えられるが，そのことは，どのような概念が動詞として，あるいは形容詞として語彙化されやすいのかという別の研究課題を生む。日本語においては必ず変化の結果として生じる状態について形容詞が成立していない場合が多く，そのような状態への変化の表現は動詞に頼ることになる。この傾向は通言語的な傾向を反映している可能性がある。さらに，日本語の状態変化表現では共イベントが表現されないことが多く，タルミーの類型論の限界が示されている。

以上，コーパスにおける状態変化表現の網羅的な調査から，日本語の状態変化の表現について，類型論的な視点から考察してきた。このような数量的な研究を各言語で積み重ねることにより，また，幅広く動詞・形容詞のレパートリーを調べるこ

とにより，状態変化表現の類型論的特徴について，より経験性の高い議論ができるようになると思われる。

参照文献

Acedo-Matellán, Victor (2016) *The morphosyntax of transitions: A case study in Latin and other languages*. Oxford: Oxford University Press.

有薗智美（2009）『身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の認知言語学的研究』名古屋大学博士論文.

Beavers, John, and Andrew Koontz-Garboden (2020) *The roots of verbal meaning*. Oxford: Oxford University Press.

Beavers, John, Michael Everdell, Kyle Jerro, Henri Kauhanen, Andrew Koontz-Garboden, Elise LeBovidge, and Stephen Nichols (2021) States and changes-of-state: A crosslinguistic study of the roots of verbal meaning. *Language* 97: 439–484.

Carlson, Greg (1980) *References to kinds in English*. New York: Garland.

陳奕廷，松本曜（2018）『日本語語彙的複合動詞の意味と体系―コンストラクション形態論とフレーム意味論―』東京：ひつじ書房.

Croft, William A. (1991) *Syntactic categories and grammatical relations*. Chicago: Chicago University Press.

Croft, William A. (2012) *Verbs: Aspect and causal structure*. Oxford: Oxford University Press.

Croft, William A., Jóhanna Barðdal, Willem B. Hollmann, Violeta Sotirova, and Chiaki Taoka (2010) Revising Talmy's typological classification of complex event constructions. In: Hans C. Boas (ed.) *Contrastive studies in construction grammar*, 201–236. Amsterdam: John Benjamins.

Dixon, R. M. W. (1982) *Where have all the adjectives gone?: And other essays in semantics and syntax*. Berlin: Mouton.

Dixon, R. M. W. (1991) *A new approach to English grammar, on semantic principles*. Oxford: Oxford University Press.

Dixon, R. M. W. (2004) Adjective classes in typological perspective. In: R. M. W. Dixon, and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *Adjective classes: A cross-linguistic typology*, 1–49. Oxford: Oxford University Press.

Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.

Goldberg, Adele E. and Ray Jackendoff (2004) The English resultative as a family of constructions. *Language* 80: 532–569.

Grondelaers, Stefan and Dirk Geeraerts (2003) Towards a pragmatic model of cognitive onomasiology. In: Hubert Cuyckens, Rene Dirven, and John R. Taylor (eds.) *Cognitive approaches to lexical semantics*, 67–92. Berlin: Mouton de Gruyter.

Gruber, Jeffrey S. (1965) *Studies in lexical relations*. Unpublished doctoral dissertation, MIT.

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学―言語と文化のタイポロジーへの試論』東京：大修館書店.

Ito, Akinori (2018) *A corpus-based study of linguistic encoding of motion and change-of-state expressions*. Unpublished doctoral dissertation, Kobe University.

Iwata, Seizi (2008) A door that swings noiselessly open may creak shut: internal motion and concurrent changes of state. *Linguistics* 46: 1049–1108.

岩田彩志（2010）「Motion と状態変化」『レキシコンフォーラム（5）』27–52．東京：ひつじ書房.

Jackendoff, Ray (1983) *Semantics and cognition*. Cambridge, MA: MIT Press.

Janda, Laura A. (2013) Quantitative methods in cognitive linguistics: An introduction. In: Laura A. Janda (ed.) *Cognitive linguistics – The quantitative turn: The essential reader*, 1–32. Berlin: Mouton de Gruyter.

影山太郎（1993）『文法と語形成』東京：ひつじ書房.

Kageyama, Taro and Li Shen (2018) Resultative constructions in Japanese from a typological perspective. In: Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese contrastive linguistics*, 193–225. Berlin: De Gruyter Mouton.

Kahumburu, Monica and Yo Matsumoto (To appear) A corpus-based study of the externality of emotions in Swahili and Japanese. In: Judit Baranyine Koczy and Veronika Szelid (eds.) *Past in present: Cultural linguistics and (re)conceptualized traditions*. Singapore: Springer Nature.

Kawachi, Kazuhiro (2016) Introduction: An overview of event integration patterns in African languages. *Asian and African Languages and Linguistics* 10: 1–36.

Kawachi, Kazuhiro, Erika Bellingham, and Jürgen Bohnemeyer (2018) Different types of causality and clause linkage in English, Japanese, Sidaama, and Yucatec Maya.『日本認知言語学会論文集第 18 巻』pp. 47–59.

川野靖子（2021）『壁塗り代換をはじめとする格体制の交替現象の研究』東京：ひつじ書房.

岸本秀樹（2001）「壁塗り構文」影山太郎（編）『日英対照 動詞の意味と構文』100–126. 東京：大修館書店.

Koptjevskaja-Tamm, Maria (2015) Introducing "The linguistics of temperature". In: Maria Koptjevskaja-Tamm (ed.) *The linguistics of temperature*, 1–40. Amsterdam: Benjamins.

Koptjevskaja-Tamm, Maria (2022) Semantic maps and temperature: Capturing the lexicon-grammar interface across languages. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 41(1): 125–177.

工藤真由美（2007）『日本語形容詞の文法』東京：ひつじ書房.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: The University of Chicago Press.

Langacker, Ronald W. (1995) Raising and Transparency. *Language* 71: 1–62.

Langacker, Ronald W. (2005) Construction grammars: Cognitive, radical, and less so. In: Francisco J. Ruiz de Mendoza Ibanez, and M. Sandra Pena Cervel (eds.) *Cognitive linguistics: Internal dynamics and interdisciplinary interaction*, 101–159. Berlin: Mouton de Gruyter.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, MA: MIT Press.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (2013) Lexicalized meaning and manner/result complementarity. In: Boban Arsenijević, Berit Gehrke, and Rafael Marín (eds.) *Studies in the composition and decomposition of event predicates*, 49–70. Dordrecht: Springer.

Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (2014) Manner and result: The view from *clean*. In: Rob Pensalfini, Myfany Turpin, and Diana Guillemin (eds.) *Language description informed by theory*, 337–357. Amsterdam: John Benjamins.

Majid, Asifa, Melissa Bowerman, Miriam van Staden, and James S. Boster (2007) The semantic categories of cutting and breaking events: A crosslinguistic perspective. *Cognitive Linguistics* 18: 133–152.

Matsumoto, Yo (1996a) *Complex predicates in Japanese: a syntactic and semantic study of the notion 'word'*. Stanford, CA: CSLI Publications.

Matsumoto, Yo (1996b) Subjective change expressions in Japanese and their cognitive and linguistic bases. In: Gilles Fauconnier and Eve Sweetser (eds.) *Spaces, worlds and grammars*, 124–156. Chicago: University of Chicago Press.

松本曜（1997）「空間移動の言語表現とその拡張」田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』125–230. 東京：研究社.

Matsumoto, Yo (2003) Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformulations. In: Shuji Chiba et al. (eds.), *Empirical and theoretical investigations into language: A festschrift for Masaru Kajita*, 403–418. Tokyo: Kaitakusha.

松本曜（2017a）「移動表現の類型に関する課題」松本曜（編）『移動表現の類型論』1–24. 東京：くろしお出版.

松本曜（2017b）「日本語における移動事象表現のタイプと経路の表現」松本曜（編）『移動表現の類型論』247–273. 東京：くろしお出版.

Matsumoto, Yo (2020) Neutral and specialized path coding: Toward a new typology of path-coding devices and languages. In: Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi (eds.) *Broader perspectives on motion event descriptions*, 281–316. Amsterdam: John Benjamins.

松本曜（2021）「移動表現の研究におけるコーパスと実験」篠原和子・宇野良子（編）『実験認知言語学の深化』287–309. 東京：ひつじ書房.

Matsumoto, Yo (To appear) Introduction: NINJAL Project on Motion-event descriptions across languages. In: Yo Matsumoto (ed.) *Case studies of linguistic representation of motion*. Berlin: De Gruyter Mouton.

Matsumoto, Yo, and Kazuhiro Kawachi (2020) Introduction: Motion event descriptions in broader perspective. In: Yo Matsumoto and Kazuhiro Kawachi (eds.) *Broader perspectives on motion event descriptions*, 1–22. Amsterdam: John Benjamins.

McNulty, Elaine (1988) *The syntax of adjunct predicates*. Unpublished doctoral dissertation, University of Connecticut.

村木新次郎（2019）『語彙論と文法論と』東京：ひつじ書房.

Nagaya, Naonori (To appear) Motion event descriptions in Tagalog. In: Yo Matsumoto (ed.) *Case studies of linguistic representation of motion*. Berlin: De Gruyter Mouton.

仁田義雄（1983）「結果の副詞とその周辺」渡辺実編『副用語の研究』東京：明治書院.

小野尚之（2004）「移動と変化の言語表現：認知類型論の視点から」佐藤滋・堀江薫編.『対照言語学の新展開』東京：ひつじ書房.

Recanati, François (2010) *Truth-conditional pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.

Reznikova, Tatiana, Anna Panina, and Victoriya Kruglyakova (2022) A matter of degree? The domain of wetness in a typological perspective. In: Ekaterina Rakhilina, Tatiana Reznikova, and Daria Ryzhova (eds.) *The typology of physical qualities*. Amsterdam: John Benjamins.

Simpson, Jane (1983) Resultatives. In: Lori Levin, Malka Rappaport and Annie Zaenen (eds.) *Papers in lexical-functional grammar*, 143–157. IULC, Bloomington, IN.

Son, Minjeong and Peter Svenonius (2008) Microparameters of cross-linguistic variation: Directed motion and resultatives. In: Natasha Abner and Jason Bishop (eds.) *Proceedings of the 27th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 388–396. Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.

スプリング・ライアン（2015）「事象フレームの言語類型と第二言語習得―移動と状態変化の表現を巡って―」由本陽子・小野尚之（編）『語彙意味論の新たな可能性を探って』408–431.　東京：開拓社.

Talmy, Leonard (1985) Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In: Timothy Shopen (ed.) *Language typology and syntactic descriptions:* Vol. 3. *Grammatical categories and the lexicon*, 36–149. Cambridge: Cambridge University Press.

Talmy, Leonard (1991) Path to realization: A typology of event conflation. *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 17, 480–519. Berkeley Linguistics Society.

Talmy, Leonard (2000) *Toward a cognitive semantics:* Vol. 2. *Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.

玉村文郎（1975）「語彙論から見た形容詞」『同志社国文学』10: 87–104.　同志社大学国文学会.

Wachowski, Wojciech, and Karen Sullivan (2022) *Metonymies and metaphors for death around the world*. New York: Routledge.

Washio, Ryuichi (1997) Resultatives, compositionality and language variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6: 1–49.

八亀裕美（2004）「述語になる品詞の連続性―動詞・形容詞・名詞」工藤真由美（編）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系―標準語研究を超えて―』78–119.　東京：ひつじ書房.

八亀裕美（2008）『日本語形容詞の記述的研究―類型論的視点から』東京：明治書院.

『分類語彙表 増補改訂版』（2004）東京：国立国語研究所.

執筆者連絡先：
国立国語研究所
e-mail: yomatsum[at]ninjal.ac.jp

［受領日　2023 年 10 月 30 日
最終原稿受理日　2024 年 4 月 15 日］

Abstract

Linguistic Expressions of Changes of State in Japanese: A Quantitative Study of Cognitive Typology

Yo Matsumoto
National Institute for Japanese Language and Linguistics / The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

Keigo Ujiie
National Institute for Japanese Language and Linguistics

As an attempt at a data-oriented cognitive-typological study of language, we present an analysis of the linguistic representations of changes of state in Japanese. The expressions of 12 different changes of state found in BCCWJ are analyzed in a framework also used for the typology of motion-event descriptions (Matsumoto 2017a; see also Talmy 2000). The study reveals that a change of state (or at least the transition of change) is expressed overwhelmingly in the head position of a sentence; very often the transition and the resultant state are expressed together by the main verb. In this respect, Japanese can be said to be a "head change-coding language." Compared with the expressions of spatial motion, which similarly use the head position to encode path, expressions of state changes encode change very often in the head *only*, testifying to a greater role of the head for changes of state. There are large variations in the degree to which the head is used, depending on the type of state change, inviting an explanation of what sort of state and change of state are expressed with the use of verbs as opposed to adjectives. Furthermore, the low frequency of "co-events" occurring with changes of state demonstrates the limitations of Talmy's typology.